



ね、この本よんだ?

2012. 4~2013. 3



図書館で毎月発行している『としょかん通信』でご案内した
「あたらしい子どもの本」のリストです。

絵本、読みもの、テーマ本の三つの柱にわかれた
全部で60冊のブックガイドとなっており、
この一年、職員が手にとって選んだおすすめの本が
リストアップされています。

2008年度から始めて第5集になります。
紹介した本は、図書館で貸出ご利用いただけます。

このリストが、子どもたち、そして大人のみなさんにとっても
素敵な本との出会いのきっかけになりますように。



久留米市立中央図書館



区分	NDC分類	内容	タイトル
絵本	913	日本の作品	『ぞうはどこへいった？』 『やまねこのおはなし』 『さかさことばでうんどうかい』 『シールのかくれんぼ』 『おうさまのおひっこし』 『キラキラ』 『うどんのうーやん』 『はしれトロッコれっしゃ』 『クリスマスのあくま』 『なないろのプレゼント』 『アリゲイタばあさんはがんこもの』 『びんぼうがみじゃ』
	931	海外の作品	『しずかなしずかなクリスマス・イヴのひみつ』
	933	海外の作品	『空のおくりもの』 『ネビルってよんでみた』 『モグラくんがみたおひさま』 『105にんのすてきなしごと』 『いぬのおしりのだいじけん』 『こうもりぼうやとハロウィン』 『あそこへ』 『チャーリーのはじめてのよる』 『いいこでねんね』
	949	海外の作品	『キムのふしぎなかさのたび』
	953	海外の作品	『ジブリルのくるま』
読みもの	913	日本の作品	『鷹のように帆をあげて』 『公平、いっばつ逆転！』 『月の少年』 『あしたもきつとチョウ日和』 『みさき食堂へようこそ』 『ポテトサラダ』 『保健室の日曜日』 『世界一かわいげのない孫だけど・・・』 『はなこ 野の花 野のきつね』 『おひさまやのテーブルクロス』 『ともだちのはじまり』 『お手紙ありがとう』
	933	海外の作品	『そして、ぼくの旅はつづく』 『ダメ犬ジャックは今日もごきげん』 『うちはお人形の修理屋さん』 『名犬ボニーはマルチーズ ①ボニーがうちにやってきた』 『アラルエン戦記① 弟子』 『ぼくの見つけた絶対値』 『マドレーヌは小さな名コック』 『発電所のねむるまち』 『魔法がくれた時間』
	943	海外の作品	『ライオンがいないどうぶつ園』
	953	海外の作品	『ヤーク』 『ジャコのお菓子な学校』
テーマ本	007	情報	『気をつけよう！情報モラル①ゲーム・あそび編』
	080	生き物	『ご近所のムシがおもしろい！』
	209	歴史	『古代文明の大研究』
	301	ものの見方・考え方	『決め方の大研究』
	369	災害	『にげましょう』
	374	食育	『弁当づくりで身につく力』
	489	動物	『ゾウの森とポテトチップス』
	498	医学	『暑さとくらし』 『元気な脳が君たちの未来をひらく』
	491	医学	『ぶりっぺ・すかっぺ』
	596	料理	『野菜嫌いがなくなる魔法のレシピ』
814	言葉	『わざわざことわざ』	

『ぞうはどこへいった?』

五味太郎/作・絵
偕成社

ある日、ぞうが草原にいるとあやしげな人たちがやってきました。「あ なんだか いやな予感・・・」。すると彼らはぞうを箱に入れて、どこか遠くへつれて行ってしまいました。ところが、ついた港で彼らがふたをあけると、中にはだれもいません。ぞうは一体どこへ行ったというのでしょうか?ぞうが箱に入れられて、どうしていたかという・・・。ちょっと意外なゾウさんの行動にびっくりなおはなしです。

『やまねこのおはなし』

どいかや/作
きくちちき/絵
イースト・プレス

山のおくに、ひとりきままにのんきに暮らすやまねこがいました。あるとき、知らない世界が見たくなったやまねこは、まちへとでかけて行くことにしました。ところがそのとちゅうで、元気のないこねこをみつけたやまねこは、ははねこも見あたらないこねこを放っておけず、ねこをつれて山へともどり、いっしょに暮らしはじめます。やまねこの、優しくてあたたかいおはなしです。

『さかさことばでうんどうかい』

西村敏雄/作
福音館書店

楽しいどうぶつたちのうんどうかい。ぱんくいきょうそうに、とびばこ、じゅうりょうあげに、しんたいそう。いろんな種目で、動物たちが大活躍。ぱんくいきょうそうでは、ぞうくんが、ぱんをいっぱい食べてるし、さるは、ぱんにわるさをしてる。そんなうんどうかいのドタバタなようすが、うえからよんでも、したからよんでもおなじ、さかさことばで書かれているんです!ことばあそびも楽しい絵本ですよ。

『シールのかくれんぼ』

定岡フミヤ/作・絵
講談社

なおきくんがあそんでいると、シールがでてきました。そーっとかべにシールをはっていると、「なおちゃん」とおかあさんのこえがきこえてきて、あしおとがちかづいてきます。あわててかべにびたりとからだをよせたなおきくん。「どうか、おかあさんにみつきりませんように、、、!」でも、おかあさんがむこうへいって、からだをはなそうとすると、、、うごきません!なんと、なおきくんはシールになっていたのです!もとにもどることが、できるのでしょうか?

『おうさまのおひっこし』

牡丹靖佳/作
福音館書店

遠い遠い国のこと。山あいの小さなお城に、恥ずかしがり屋のおうさまと、あわてんぼうのおともたちが暮らしていました。おうさまは、困っているものがいると助けようとはしますが、恥ずかしがってうまく命令できません。おともたちもかんちがいして、とんでもないことばかりしてかします。そんなかんちがいから、今度はお城を引っこすことに。その途中、おうさまは、いつものように困ったものたちを助けようと命令しますが・・・。恥ずかしがり屋の優しいおうさまと、あわてんぼうの気のいいおともたちのゆかいなお話です。

『キラキラ』

やなせ たかし/作・絵
フレーベル館

むかし、たかいやまにキラキラというかいぶつがすんでいました。あるひ、やまのふもとにすんでいるあばれんぼうのキリが、キラキラをたたきころそとやまにむかいましたが、それっきりかえってきませんでした。キリのおにいさんのキルは、おとうとをさがすために、やまへのぼりますが・・・。キラキラはわるいかいぶつなののでしょうか?よいかいぶつなののでしょうか?よんでみてみんなはどうおもったかな?

『うどんのうーやん』
岡田よしたか／作
ブロンズ新社

「うーやん でまえや たのむ
でー」うどんのうーやん、じぶん
でまえにでかけます。「あつあつが
おいしいからな」と「ダッシュでい
くぞう」でも、きのいいうーや
ん、とちゅうではらべこのねこにう
どんをはんぶんあげてしまったり、
そうめんや、とうふ、うめぼし、た
こやき、なんでも「ここ はいり」
とおつゆにいれてやります。きつね
うどんのうーやんが、しまいにはな
にがなんだかわからないものになっ
てしまいました。おきやくさん、た
べてくれるかな？

『はしれトロッコれっしゃ』
西片拓史／作・絵
教育画劇

こうくんは列車が大好きな男の子。山
のふもとの小さな駅にやってくると、
小さなかげが駅のうらへきえていきま
した。「あれっ？いまのなんだろ
う？」とかげをおいかけたこうくんの
まえにあらわれたのは、草むらの向こ
うの小さな駅。トロッコ列車からおり
てきたのはくまの運転手さんでした。
「こまったこまった、しゃしょうさん
がたりないよ」というので、こうくん
はおてつだいをし、一日しゃしょう
さんになることに。ちゃんとおてつだ
いできるかな？

『クリスマスのあくま』
原マスミ／作・絵
白泉社

クリスマスにはなにかわるいことをし
なければならぬあくまの子は、何も
思いつかず、だいまおうさまからおし
おきされるのもいやで、逃げだそうと
考えます。すると目の前に、だいまお
うさまが！実はそのだいまおう、煙突
からおこちて真っ黒になったサンタ
だったのですが、勘違いしているあく
まの子を見て、サンタはだいまおうに
なりすまし、仕事をあくまの子に手伝
わせます。すっかり本物だと信じたあ
くまの子は、言われるがままにお手伝
いをしますが…。クリスマスの夜の
一匹のあくまのおはなしです。

『なないろのプレゼント』
石津ちひろ／作
松成真理子／絵
教育画劇

ななちゃんは、サンタさんにもらっ
たばかりのだいじなたからもののに
じいろマフラーを見せたくて、おば
あちゃんのうちへむかっています。
すこしでもはやく見せたくては
しりはじめて、ふと気がつくマフ
ラーがきえていました。ななちゃん
はなきながらおばあちゃんのうちへ
かけこむと、おばあちゃんはやさし
くいっしょにさがしてくれること
になりました。さて、マフラーはどこ
に……。

『アリゲイタばあさんはがんこもの』
松山円香／作
小学館

仏頂面で、いかついワニのアリゲイ
タばあさんは、意地っ張りのがんこ
もの。むらはすれの沼のほとりに、
一人で暮らしていました。むらのみ
んなにきのご狩りに誘われても、
「予定が違う」とびしゃりと断り追
い返す。そんなアリゲイタばあさ
ん、むらのみんなの嫌われもの？い
えいえ、そうでもなさそうですよ。
強がってるけど、本当は心優しいア
リゲイタばあさんのこと、みんなわ
かってくれているみたいですね。

『びんぼうがみじゃ』
荻田澄子／作
西村繁男／絵
教育画劇

たっくんの家は、おいしいだんごやで
す。ある日、ぼろぼろの着物をきたお
じいさんがやってきて、自分は貧乏神
だと名のつたから、さあ大変。だんご
にかびがはえ、レジのお金はなくな
り、貧乏神がくしゃみをするとお店は
ほこりだらけになってしまいました。
でもおかあさんが貧乏神をお風呂に入
れてきれいにしあげると、、、。さ
てさて、もとどおりのお店にもどれる
でしょうか？

『しずかなしずかなクリスマス・イヴのひみつ』
クレメント・クラーク・ムーア／詩
アンジェラ・バレット／絵
石井睦美／訳
BL出版

家中がしずまりかえっているクリスマス・イヴの夜。こどもたちは眠りについてゆめをみている。おとうさんとおかあさんも眠りにつきました。その時、外からカタカタと音がきこえてきて、おとうさんはベッドからとびおき、窓辺に行くと、八頭のちいさなトナカイと、ちいさなおじいさん、サンタクロースのいっこう一行を目にしました。それから、屋根にかけあがり、サンタクロースは……。絵もきれいなクリスマスのおはなしです。

『空のおくりもの』
マイケル・キャッチプール／作
アリソン・ジェイ／絵
亀井よし子／訳
ブロンズ社

あるところに雲から糸をつむいで布をおる少年がいました。少年は、かあさんにおそわったとおり、必要な分だけ雲をもらって布をおってくらしていました。ある日、少年が雲からつくったマフラーをまいて広場へでかけると、それを見た王さまがもっとその布をつかって様々なものをつくるように少年に命じます。「それはよくありません」と少年は言うのですが、王さまは聞き入れず、やがて少年が布をおりはじめると、空から雲がへってきて……。自然とともに生きていくことの大切さをおしえてくれるおはなしです。

『ネビルってよんでみた』
ノートン・ジャスター／作
G. プライアン・カラス／絵
石津ちひろ／訳
BL出版

「きょうから この みなれないい えが、おとこのこの あたらしいうちだ。そして、してるこがひとりもない がっこうにかよう。」ひっこしてきたばかりのおとこのこは、明日からのこと考えると不安でいっぱいです。そんなようすを心配したおかあさんにすすめられ、そのへんをひとまわりすることになったおとこのこは、まちかどでふと名前を呼んでみました。不安だった明日がちょっと楽しみにかわっていく、そんな素敵な一冊です。

『モグラくんがみたおひさま』
ジーン・ウィリス／文
サラ・フォックス-デイビス／絵
三原 泉／訳
BL出版

もうすぐ夜明け。モグラくんは、おひさまがのぼるところを、みたことがありません。お友だちのハタネズミに誘われて、日の出をみにいくことにしました。スズメとリスとウサギもおひさまを待っています。さあ、おひさまのてっぺんがみえてきました。みんなは口々に、だんだんのぼっていくおひさまのようすをモグラくんにはなします。モグラくんにはどんなふうにもえたのでしょうか？友だちを思いやる気持ちがあたたかな絵本です。

『105にんのすてきなしごと』
カーラ・カスキ／文
マーク・シーモント／絵
なかがわちひろ／訳
あすなる書房

金よう日の夕方。105人の人たちが、しごとにでかけるよういをはじめます。105人のうち、男の人は92人で、女の人は13人です。おふろにはいって、白と黒のようふくにきがえ、外へ出かける準備をします。それぞれに形の違うかばんを抱えながら、家族にあいさつをして、まちのホールへとむかいます。席につき、棒が振りおろされると、さあ、しごとの始まりです！さて、彼らのしごとは一体何でしょうか？105人がつくりあげる、“すてきなしごと”のお話です。

『いぬのおしりのだいじけん』
ピーター・ベントリー／文
松岡芽衣／絵
灰島かり／訳
ほるぷ出版

せかいじゅうのいぬたちがあつまったパーティーかいじょうのドアには「おしりはぬいで、おしりかけにおかけください」というはりがみがありました。いぬたちはみんなピンクのおしりをぬいで、かいじょうにはいりました。ところが、にぎやかなパーティーのとちゅう、かじがおきて……。いぬたちがおしりをかきあうひみつがわかる、たのしいおはなしです。

『こうもりぼうやとハロウィン』

ダイアン・メイヤー／文
ギデオン・ケンドール／絵
藤原宏之／訳
新日本出版社

こうもりのぼうやは、お母さんと一緒に図書館のやねうら部屋に住んでいます。ぼうやがねていると、わらいごえがきこえてきました。目をさましたぼうやが下の部屋をのぞくと、そこにはたくさんの子ども達がいて、女の人がおはなしをしていました。すっかりおはなしが気に入ったぼうやは、もっと近くで聞きたいと思いますが、お母さんに、絶対に人間に近づいてはいけぬ、大丈夫な時がくるまでは、といわれます。大丈夫な時っていつのこと？ぼうやはじっと待ち続けて、、、、。かわいいこうもりのぼうやのお話です。

『あそこへ』

マリー・ルイズ・
フィッツパトリック／作・絵
加島祥造／訳
フレーベル社

「あそこ」は、「あそこ」へ、「あそこ」では、…。はっきりとしたことが何もわからない「あそこ」。期待や不安、様々な想像や思いを抱きながら女の子は、「ここ」ではない「どこか」へと思いを馳せます。ちょっとした「あそこ」から、はるか彼方の「あそこ」へ。誰もが一度はそんな女の子のように、「あそこ」へ思ったことがあるのではないのでしょうか。これはそんな思いを汲んだ一冊の不思議な絵本です。

『チャーリーのはじめてのよる』

エイミー・ハスト／文
ヘレン・オクセンバリー／絵
さくまゆみこ／訳
岩崎書店

ヘンリーはこいぬをひろった。名前はチャーリー。ヘンリーの家での、はじめての夜。チャーリーは、キッチンで一人で寝ることに。ヘンリーはチャーリーが安心して眠れるように心をつくします。真夜中、不安に打ち震え、何度も鳴き声をあげるチャーリー。ヘンリーはその度にキッチンへ駆けつけ、チャーリーをしっかりと抱きあげて、やさしく声をかけ、眠るまで一緒にいてやります。小さな男の子が、自分よりも小さく弱いこいぬをいたわり、思いやる姿が温かく描かれた絵本です。

『いいこでねんね』

デヴィッド・エズラ・シュタイン／作
さかいくにゆき／やく
ポプラ社

にわたりのピーヨは、おやすみの時には、いつもパパにおはなしをよんでもらいます。今日は「ヘンゼルとグレーテル」をよんでもらっていました。でも、ヘンゼルとグレーテルがおかしの家に入ろうとした時、ピーヨは「だめ！このひと、わるいまじょよ！」とさげんで、「ヘンゼルとグレーテルはぶじにおうちにかえりました。おしまい！」とおはなしをおわらせてしまいました。どのおはなしをよんでも同じことをするピーヨにパパは、よいことを思いつきます。みんなは「いいこでねんね」できるかな？

『キムのふしぎなかさのたび』

ホーカン・イェンソン／文
カーリン・スレーン／絵
オスターグレン晴子／訳
徳間書店

ざあざあぶりのあめのひ、ちいさなおんなのこのキムは、パンやさんのそとでママをまっていた。あまどいからながれるみずに、あしをつっこんでみると、まるでかわみたい。そうだ、かさをふねにとびのると、かさのふねはあつというまにながれにのって、まちをぬけ、カバヤワニのいるジャングルをとおり、うみへとキムをつれていきます。あめのひの、ふしぎな冒険のおはなしです。

『ジブリルのくるま』

市川里美／作
BL出版株式会社

ジブリルは、さばくのむらにすむ男の子。さばくでいちにち、らくだや、やぎのせわをしています。ジブリルが、いまいちばんすきなのは、くるまづくり。あきカン、ペットボトル、こわれたサンダルやボールペン、なんでも、ちいさなくるまにかえてしまいます。でも、ある日、お父さんに「そんなガラクタ、ぜんぶすててこい」と言われてしまいます。つぎのあさ、くるまをつんだらくだをつれて、トボトボとでかけたジブリル。だいじなくるまを、ほんとうにすててしまうのでしょうか？

『鷹のように帆をあげて』

まはら三桃 / 作
講談社

理央は最近毎日、学校の帰り道に鳥専門のペットショップ「ブルーウィング」に寄り道している。そこにいるタカが気になっているのだ。ヒナの頃、親友の遥が「かわいい」と言っていた。突然の事故で死んでしまった遥が……。大きくなったタカを空へ飛ばしたら、遥にも見えるだろうか？理央は、タカの使い手である鷹匠をめざすことに。深く傷ついた少女が、周りの人々に見守られながら、ゆっくり立ち直っていく姿を描いた物語。

『公平、いっばつ逆転！』

福田隆治 / 作
小松良佳 / 絵
偕成社

白石公平は、気がよくてめだつのがきらいな小学五年生。なのに、家のポストにはよくわからないラブレターが入っていたり、転校先の学校ではなぜか周りの様子がおかしくて……。このぼくが空手の名人でツヨイ男？いじめのグループにめをつけられ、いつのまにか出ることになってしまった相撲大会では、彼らを相手に戦うことに。流されやすく、気よわで逃げ腰だけど、まわりに支えられながら奮闘する少年のおはなしです。

『月の少年』

沢木耕太郎 / 作
浅野隆広 / 絵
講談社

父親と母親を亡くしてしまった冬馬は、おじいさんの家に引き取られてきました。「みずの家」と呼ばれるおじいさんの家の前の湖の真ん中に、満月になると男の子が現れて、笛を吹くのを見かけます。学校に行かなくなった冬馬は次の満月の日、勇気を出して男の子に話しかけます。冬馬は、今までは月の中にウサギがいるのではなく、人がつかみ合いをしているように見えたのですが、次の満月の夜は、ふたりの人が抱き合っているように見えました。次の日から学校に行こうと決めた冬馬の心境の変化は？

『あしたもきっとチョウ日和』

高田桂子 / 作
亀岡亜希子 / 絵
文溪堂

奈美は小学4年生。仕事でいそがしい両親を気づかって、世話のやける妹、ミチルの面倒をみたり、家事をしたり、毎日大いそがし。ミチルはかわいいいけれど、もうお母さん役は、アップアップ。自分だけの時間もないし、秘密ももてない。クラブもやりたいのに……。でも、そんな気持ちは口にできなかった。そんな時、冴子のおすすめの本にでてきた「虫愛する姫君」は、思ったことをきちんと言える女の子。「虫愛する姫君」に背中をおされ、奈美の中で変化がおこる。現実と幻想の間を行ったり来たりしながら、少しずつ成長していく女の子の物語。

『みさき食堂へようこそ』

香坂直 / 作
北沢平祐 / 絵
講談社

海につきだした、ほそながい岬。その鼻のようなその岬は、さきっぽ岬とよばれています。そのいちばんさきっちょにあるのが、みさき食堂。食堂の主人はハルさんというおばあちゃん、孫のたまみちゃんもおてつだいをしています。ときたま、みさき食堂には、ふしぎなお客さんが、どこからともなく、ひょい、とあらわれます。たべたいものがあるけど、わけがあったべられない人がやってくるのです。きょうは、小学生のおねえちゃんがくるようです。さてさて、何をたべたいのでしょうか？思わず行ってみたくなる、すてきな食堂のお話です。

『ポテトサラダ』

福明子 / 作
江頭路子 / 絵
学研教育出版

ぶたのぬいぐるみのトントンは、商店街のお肉屋さん「せのお精肉店」のマスコット。そのお店のポテトサラダが大好きなケイくんが、サラダをつくっているおじいさんへプレゼントしたぬいぐるみです。今日もお店にぶら下がり、お店とお客さんを見守っています。そんなある日、商店街の近くにスーパーができてしまっただピンチ。その頃、いつもポテトサラダを買いに来てくれていたケイくんも突然来なくなって…。あなたにとっての大切な味は何ですか？これは、ケイくんのそんな大切な味のおはなしです。

『保健室の日曜日』

村上しいこ／作
田中六大／絵
講談社

子どもたちがお休みの日曜日の保健室。体温計やほうたい、保健室の道具たちがおしゃべりをしています。ベッドの上で寝ていただっこ赤ちゃんは、「いのちの体験学習」で2年生の女の子に「にせもの」と言われてショックを受けています。しんぞうの音がきこえなかったからです。道具たちは、「生きてるしるし」をさがすため、お出かけをはじめます。さて、はたして「生きてるしるし」はみつかったのでしょうか。

『世界一かわいげのない孫だけど・・・』

荒井寛子／作
勝田文／絵
ポプラ社

住みなれた東京から、祖母のいる田舎に親子でひっこしてきた美波。ビルもお店もなく、見わたすかぎり山ばかりのド田舎も、おせっかいな友達がいる学校も、嫌味星人のおばあちゃん「毬乃さん」がいる家も、とにかく何もかもが気に入らない。おでこにバーコードはりつけたみたいなの、暗い顔で過ごしていた美波だったが、「アヒル」と「アズキ」に押し切られ、演劇部に入部することに。いやいや始めた部活動だったが、そこから何か少しずつ変わり始めて・・・。美波たちがつくる落語や「なぞかけ」もおもしろいよ。

『はなこ 野の花 野のきつね』

しんきみこ／作
なかいともしこ／絵
福音館書店

大きなおわんと小さなおわんをさかさまにして、こぼりかさねたようなとんとん山に、きつねのはなこは優しいかささんぎつねと一緒にすんでいます。ある日、はなこがひとりで変身の術の練習に出かけると、神社で人間の女の子がひとり、目をつぶって両手を合わせていました。
〈なにをおねがいでいるのだろう〉女の子となかよくなりたいたいはなこは、。。。美しい山の自然の中で成長していく、きつねの女の子のお話です。

『おひさまのテーブルクロス』

茂市久美子／作
よしざわけいこ／絵
講談社

かたづけるのが苦手なはるかの部屋は、いつもちらかりっぱなし。ある日、同じようにいつも部屋を散らかしているあやちゃんの家に行くと部屋をがきれいに片付いていて、なんだか落ち込んでしまいます。その帰り道、おひさまやというお店で、はるかは部屋がきれいになるというまほうのテーブルクロスに出会い、さっそくそれを持って帰りますが・・・。そのテーブルクロスは一体どんなまほうをかけたのでしょうか？それは、きみの周りにもあるかもしれないちょっとした素敵なまほうです。

『ともだちのはじまり』

最上一平／作
みやこしあきこ／絵
ポプラ社

活発な女の子じゅじゅと、引っ込み思案な女の子さとは、学校の席が隣同士ですがあまり話したことがありませんでした。ある日、消しゴムを忘れたじゅじゅに、さとが消しゴムをかしてあげてから、二人は話をするようになりました。そして、じゅじゅはさとに、あるひみつを打ち明けます。二人の仲は急接近。いろいろな場所へも出かけます。性格が全く違う二人が友情で結ばれていく、心温まるおはなしです。

『お手紙ありがとう』

小手鞠るい／作
たかすかずみ／絵
WAVE出版

いっしょに遊んで楽しかった気持ちを書いた男の子の手紙。夏休みにスケッチにつきあってもらった喜びを書いた女の子の手紙。転校してきてさみしくて泣いていた時にはげましてくれた思い出を書いた女の子の手紙。いろいろな国をめぐり、いろいろな経験をして旅をしているのがつらくなった時、いやしてもらった旅人の手紙。そして、校長先生の手紙。みんなの心あたたまる、やさしい手紙のあて先は？やがてその「ある人」からお返事が届きます。さあ、このやさしい心のやりとりは何のためだったのでしょうか？

『そして、ぼくの旅はつづく』

サイモン・フレンチ/作

小林万希子/絵

野の水生/訳

福音館書店

ドイツで生まれたアリは、幼い時に父を亡くし、母と共に祖父の家へ身を寄せます。そこで祖父にヴァイオリンの手ほどきを受け才能を開花させるアリですが、母の再婚により、大好きな祖父と離れオーストラリアに移住することになります。音楽好きの家族で開いたカフェの庭先で、ひとりヴァイオリンを弾くアリ。母と二人で旅した幼い日の思い出をたどりながら、新しい人生の扉の前に立つ少年アリの心の軌跡を描く物語です。

『ダメ犬ジャックは今日もごきげん』

パトリシア・フィニー/作

ピーター・ベイラー/絵

相良倫子/訳

徳間書店

ジャックは、大型犬のラブラドル・レトリバー。〈サルクサイ・ニホンアシ〉のたのしいボスとミセス・ボス、その子どもたち三匹といっしょにくらしている。ジャックは、大食いで、おっちょこちょいで、「あんぼんたん！」と言われてもほめられたと思う、ちょっとおぼかな犬だけど、やさしい家族のことがだいすき。ある日となりに、かわいいメス犬がひっこしてきて、、、？ あいきょうたっぴりのジャックが、笑いと感動をおとどけします。

『うちはお人形の修理屋さん』

ヨナ・ゼルディス・マクドノー/作

杉浦さやか/絵

おびかゆうこ/訳

徳間書店

九歳の女の子のアナは、三姉妹の真ん中。パパはうでのいい人形の修理屋さんで、絵の上手なママと壊れたお人形を直す小さなお店を開いています。三人の姉妹はお人形で遊ぶのが大好き。そんなある日、ヨーロッパで大きな戦争が始まり、パパは仕事を続けられなくなってしまいます。一生懸命お手伝いをして、力になりたいアナが思いついたのは・・・お人形を大切に作る女の子のほのぼのとしたお話が心を温かくしてくれる一冊です。

『名犬ボニーはマルチーズ』

①ボニーがうちにやってきた』

ベル・ムーニー/作

スギヤマカナヨ/絵

宮坂宏美/訳

徳間書店

ハリーは、新しい町にひっこしてきたばかりで、友だちもまだいない。ある日、お母さんが、うさぎよりも小さい、ねずみみたいなマルチーズをつれてきた！大きな犬がいたかったハリーは、最初はがっかりしたけれど、ボニーのふわふわの体にふれるとなんだかほっとしたんです。それに、ふたごの友だちまでできちゃった。「あたしの仕事は自分のむれ（ハリーとお母さん！）を守ること」と思っているちっちゃなリーダー、ボニーがかつやくするお話です。

『アラルエン戦記① 弟子』

ジョン・フラナガン/作

入江真佐子/訳

岩崎書店

アラルエン王国レドモンド城の孤児院で育った少年、ウィルは「選択の日」を前に緊張していた。城の孤児たちは十五歳になると、さまざまな技能を持つ巨匠たちの見習い生となるために申し出ることができるのだが、この日選ばれなかった孤児は、近所の村の農家で労働をすることになる。ウィルはなによりもそれを恐れていた。だが選択の日、ウィルを弟子として引き受けると言ったのは、なぜに包まれた不気味な男だった。はたしてウィルの運命は？

『ぼくの見つけた絶対値』

キャスリン・アースキン/作

代田亜香子/訳

作品社

数学の天才であるマイクの父親は、この夏大学の講義でルーマニアへ行くことに。そのため、十四歳のマイクはいなかにいる大おじさんと大お婆さんのうちに預けられることになってしまいました。どうやら大おじさんは掘り抜き井戸のスクリューをつくらせているらしく、僕もそのプロジェクトを手伝うように言われてきたけれど、なんだか話が違うようで…。いなかで出会った風変わりな人たちに戸惑いながらも、彼らに頼りにされたり、頼ったりしていく中で、自分の「絶対値」を見つけて成長していく少年の物語。

『マドレーヌは小さな名コック』
ルパート・キングフィッシャー／作
つつみあれい／絵
三原泉／訳

夏休みの間、パリのレストランをしているおじさんにあずけられているマドレーヌ。ある日、なぞめいた食料品店に迷いこみ、ペーストのびんづめを買いました。それを使った料理が好評で、おじさんからレシピをぬすんでくるように言われたマドレーヌ。かわった女主人とネコのいるふしぎなお店での修行はどうなることやら・・・がんばり屋でやっぱりお料理が大好き！！と思うマドレーヌの楽しいお話です。ぜひ、読んでみてください！！

『発電所のねむるまち』
マイケル・モーパーゴ／作
ピーター・ベイリー／絵
杉田七重／訳
あかね書房

友達につきとばされてけがをしたマイケルは、ミセス・ペティグルーに手当をもらう。ペティグルーさんは、海辺の湿地に鉄道の客車を置いて、そのなかで3匹の犬と、ロバと一緒にくらしている。学校帰りに、ペティグルーさんの家によく寄るようになったマイケルは、彼女から色々なことを教わる。ジャガイモをほったり、ニンジンをひっこぬいたり、庭の草の上に寝そべて、滝のようにふってくる流れ星を眺めたり。でもある日、ペティグルーさんの住む湿地に、原子力発電所の建設計画がもちあがって、、、人間の本当の幸せとは何か、深く考えさせられる本です。

『魔法がくれた時間』
トビー・フォワード／作
ナカムラユキ／絵
浜田かつこ／訳
金の星社

大好きなおじいちゃんが死んでしまおう！？どうしてもお別れしたくないファニーは、おじいちゃんに魔法の薬を飲ませます。翌日、すっかり元気になったおじいちゃんに、ファニーは大喜び。しかし元気になっても薬を飲み続けるおじいちゃんは、日に日に若返っていき・・・。
これは、魔法がくれた時間をすごしていく中で大好きな人の死を受け入れ、大切な思い出を抱えながら、次へとすすんでいく女の子のおはなしです。

『ライオンがいないどうぶつ園』
フレート・ロドリアン／作
ヴェルナー・クレムケ／絵
たかはしふみこ／訳
徳間書店

ブリッツェル町の町長さんは、どうぶつが好きな町のひとたちのためにどうぶつ園をつくることにしました。町のひとたちは喜んで協力し、どうぶつ園をつくります。徐々にどうぶつたちも増え、いよいよどうぶつ園は開園です。しかしそこは、ピーネとウリが一番楽しみにしていたライオンはいませんでした。二人はライオンをつれてきてもらおうと、みんなに呼びかけて頑張ります。ライオンがほしいこどもたちと、それに応えてあげようとする町長さんのたのしいお話です。

『ヤーク』
ベルトラン・サンティーニ／作
ロラン・ガパイヤール／絵
安積みづの、越智三起子／訳
朝日学生新聞社

「ヤーク」は毛むくじゃらで、するどいキバを持つ、世にも恐ろしいモンスター！その大好物は？・・・もちろん子ども。その小さな骨がボキボキと折れる歯ごたえが快感で、とろりとろけるあめ玉みたいな目ん玉をしゃぶるのが大好き！しかしヤークにも弱点がある。悪い子を食べると下痢してしまうのだ。そんなヤークが、天使のように心のきれいな女の子と出会った。最高級のごちそうのはずだった。しかし初めて「いとおいしい」という感情がめばえる。さあ、ヤークは女の子を食べてしまうのか？

『ジャコのお菓子な学校』
ラッセル・オスファテル／作
風川恭子／絵
ダニエル遠藤みのり／訳
文研出版

ジャコは生まれた時から食べるのが大好きな男の子。だけど勉強は大嫌い。いつも先生に怒られてばかり。ある日図書館でクッキーが表紙の雑誌を見つけたジャコ。作り方が書いてあってついつい夢中で気がつけば最後まで読んでいました。そしてそれを書き写すことに。文字もよく知らず、算数も出来ないジャコがお菓子作りのためにいろんなことを知ろうとします。そして毎週お菓子を作っては友達を招待していました。美味しいお菓子に友達は、「お店をしよう！」と言いたしますが、暴れんぼうの中学生達がやって来て大ピンチ！いろんなお菓子も出てきてワクワク！みんなはいくつ知ってるかな？

『気をつけよう！情報モラル』

①ゲーム・あそび編』

秋山浩子／文
汐文社

携帯電話やスマートフォンを使う人が増え、いつでもどこでも、わからないことを調べたり、ゲームや音楽を楽しんだりできるようになりました。便利なことも多いですが、インターネットをする時には気をつけられないといけないこともたくさんあります。個人情報ももれて迷惑メールが届いたり、無料ゲームのはずがいつのまにか有料になって、高額な請求をされてしまったりすることがあるのです。この本では、クイズをときながら安全にインターネットをする方法を学べるので、親子で携帯電話の使い方について話すきっかけにしてみてもいいのではないでしょうか。

『ご近所のムシがおもしろい！』

谷本雄治／著
岩波書店

「拝み虫」という異名をもち、幼虫のうちはアブラムシを食べ、大きくなれば芋虫もバッタも腹におさめる恐怖の三角頭——といえど何の虫だか分かりますか？そう、カマキリです。恐ろしい顔をしています、そのエサは人間が「害虫」と呼ぶものが多いため、菜園では感謝されています。てのひらサイズの生き物に強くひかれる作者は、「プチ生物研究家」を名乗り、この本の中でたくさんのムシたちの意外な姿を紹介しています。ムシ嫌いの人も、この本を読めば、ご近所のムシを見る目が変わる、、、かも？

『古代文明の大研究』

関真興／監修
PHP研究所

人間は、生活を豊かにするために、様々な創意工夫をしてきました。そのような創意工夫の成果をまとめて「文明」といい、古い時代の文明を「古代文明」とよんでいます。例えばエジプトはピラミッドで有名ですが、その数は100をこえるともいわれ、最も大きいクフ王のピラミッドは、底面の1辺が230m、高さは約146mもある巨大なものです。はるか昔に、何のために、どうやってつくったのでしょうか。この本を読みながら、古代の様々な国の人々の暮らしを想像してみても、楽しいのではないのでしょうか。

『決め方の大研究』

佐伯胖／監修
PHP研究所

“決め方”と改めて言われてるとどんなものが思い浮かびますか？この本では、席替えなどの身近なものから、スポーツの勝敗、選挙、ローマ教皇やノーベル賞まで、様々な決め方を紹介しています。どんな時に、どのような決め方をすればいいのか、どういったルールがあるのかを少し一緒に見てみませんか？どの決め方をすればいいのか正解のないものも多けれど、何かを決める時にこれを参考にしてみてもいいのではないでしょうか。

『にげましょう』

河田恵昭／著
共同通信社

大雨警報です、避難勧告です、〇〇へ逃げて下さい。さあ、あなたはどうしますか？体験したことのない災害を前にして、逃げて下さいと言われてもなかなかピンとこないかもしれません。この本ではいざという時いつどう逃げればいいのかを、それぞれの災害に応じてわかりやすく解説しています。東日本大震災を経て、災害や事故の怖さを伝え、逃げることで身を守る方法を教えてくれる一冊です。

『弁当づくりで身につく力』

竹下和男／著
講談社

「弁当の日」ってなに？—「弁当の日」は、子どもが自分で弁当をつくり、それをもって登校する日です。自分で献立を考え、材料の買い出しをし、調理、弁当箱詰め、後かたづけまで、「ひとり」でこなすのです。親は手伝いません。この「弁当の日」は、子どもの向上心を引き出し、他の人を思いやる心を育て、弁当の向こう側にある社会に気づかせてくれる……。弁当をつくるだけでなぜ？そう思った人はぜひ読んでみてください。福岡県は「弁当の日」をしている学校数で全国トップだそうですよ！

『ソウの森とポテトチップス』

横塚眞己人／写真・文
そうえん社

世界で3番目に大きな島、熱帯雨林にさまざまな生きものたちがくらす大自然の宝庫、ボルネオ島。そこにくらす野生のソウと、日本にくらす私たち。一見遠い場所の話のように聞こえますが、そこには深い関係があります。私たちが普段食べているポテトチップス、これはソウの森を切り開いて植えられたアブラヤシのパーム油を原料としています。私たちが普段何気なく食べているもの、それをつくるために彼らは森を奪われ追いやられているのです。少し振り返ってみて、自分が手にしているものがどういうものなのか、この本と一緒に考えてみませんか？

『暑さとくらし』

鈴木信恵／著
ほるぶ出版

うちわができたのはいつごろか、皆さんはご存じですか？正解は何と紀元前1000年ごろ。中国で「さしば」と呼ばれていたものがうちわの原型だそうです。人間は昔から、身近な自然をいかして、涼しくくらすために色々な工夫をしてきました。本書では、日本や世界の、昔ながらの知恵が詰まった衣服や住まいの具体例なども紹介されています。私たちも、暑いからといってすぐにエアコンのスイッチを入れる前に、できることがたくさんありそうですね。

『元気な脳が君たちの未来をひらく』

川島隆太／著
くもん出版

今の時代、科学技術の発達で、生きている人の脳を画像で見ることができるようになりました。脳の研究を通して、みなさんの将来に影響する重要ないろいろなことが分かりました。「朝ごはん」等食事や「早寝、早起き」の睡眠などの生活習慣や、学校や家での毎日の「読み、書き、計算」等の学習がどれだけ大切か、この本を読んだら、人生が大きく変わるかもしれません！！

『ぶりっぺ・すかっぺ』

村上八千世 / 文
せべ まさゆき / 絵
ほるぶ出版

おならがでるときって、どきどきしない？おっきなおとかな？とか、くさいかな？とかね。おならって、いつもおなじじゃないよね。ひによってちがうし、ひとによってもちがう。ぶりぶりぶぶぶーって「ぶりっぺ」がでたり、すすーとおとのしない「すかっぺ」がでたり。どうしてかな？たべたものや、せいかつのしかたで、でてくるおならがかわるんだ。きみのあしたのおならは、「ぶりっぺ」かな？「すかっぺ」かな？ふろくの「あしたのおならよほう」シートで、よほうしてみよう。

『野菜嫌いがなくなる魔法のレシピ』

森之翼／著
主婦と生活社

史上最年少の9歳で野菜ソムリエを取った著者による、野菜嫌い克服レシピ本。自分の経験をもとに作られているので、アイデアもおもしろいし、おいしそうで食べるのが楽しみになるような本です。ピーマンやにんじんなど、子どもが嫌いな野菜10種類を取り上げて、おいしく料理するためのコツや、少しずつ食べ慣らしていく工夫を分かりやすく解説してあります。みんなも、是非チャレンジしてみよう！！

『わざわざことわざ』

五味太郎／作
絵本館

学校で習ったり、お説教の時に引き合いに出されたりして、なんとなく堅苦しいイメージのことわざ。作者によると「ことわざ」と括弧付きで扱って、仕舞い込みすぎたのがいけないそうで、この本には五味流新解釈のことわざが盛り沢山。本来の意味にクレームをつけたり、もじって新たな珍ことわざを作ったり、おなじみの絵ともあいまって、大人から子どもまで年齢に関係なく楽しめる一冊です。